

※国指定名勝Ⅱ文化財保護法で、国が指定した文化財の種類の一つ。公園や庭園、湖沼、火山など、国土美として欠くことができず、名所、学術、芸術として価値が高いもの

1 御花皇庭園図（江戸時代中期） / 2 竣工当時の西洋館（明治42年） / 3 14代当主立花寛治肖像 / 4 完成当初の松濤園と大広間、御居間（明治末期） / 5 現在の松濤園と大広間、御居間 ※1～4は立花家史料館提供



特集 柳川の御花

275年の歴史を誇る国指定名勝

江

戸時代に柳川藩主であった立花家の歴史を伝える貴重な文化財として、国の名勝指定を受けている「立花氏庭園」。現在、明治末期に建設された西洋館や門番詰所など劣化が激しい部分の補修を、国と県、市、御花が協力して行っています。柳川の重要な観光資源の1つである御花の歴史と魅力を紹介いたします。

藩主の子どもや側室が住み大名庭園を持つ「御花島」

御

花という名前は、江戸時代の元文3（1738）年、5代藩主貞俣によって整えられた「御花島（畑）」という屋敷の呼び名が元になっています。

貞俣の子どもや側室、女中などが暮らす生活の場、いわゆる「奥」は、もとも享保7（1722）年に柳川城内に建設された二ノ丸御殿でした。

しかし、子どもが多く生まれ、「奥」で暮らす人数が増えたので、二ノ丸御殿で暮らすには狭くなり、貞俣は城の南西の隅に「奥」の屋敷を移しました。これ以降、御花島は、参勤交代で江戸と柳川を行き来する藩主が、国元でくつろぐ私的な場所となります。

また、御花島には庭園も造られていました。現在残る松濤園の東側に、当時の庭園の面影が残っています。御花皇庭園の様式は、大きな池の周りを巡りながら鑑賞して歩く回遊式庭園。熊

西洋館や松濤園が造営そして国指定名勝へ

柳

本県にある細川家の水前寺成趣園や鹿児島県にある島津家の仙巖園など、多くの大名庭園に採用されているものです。四季折々の変化を楽しめるように、サクラやモミジなどの樹木やショウブなどの植物が植えられていました。

降、東京の旧上屋敷で暮らしていましたが、隠居すると明治11年に柳川に移り住みます。鑑寛は、御花島で暮らすに当たって、敷地内に「御隠邸」「御本邸」の他、能舞台などを造りました。鑑寛の後を継いだ14代当主寛治が、

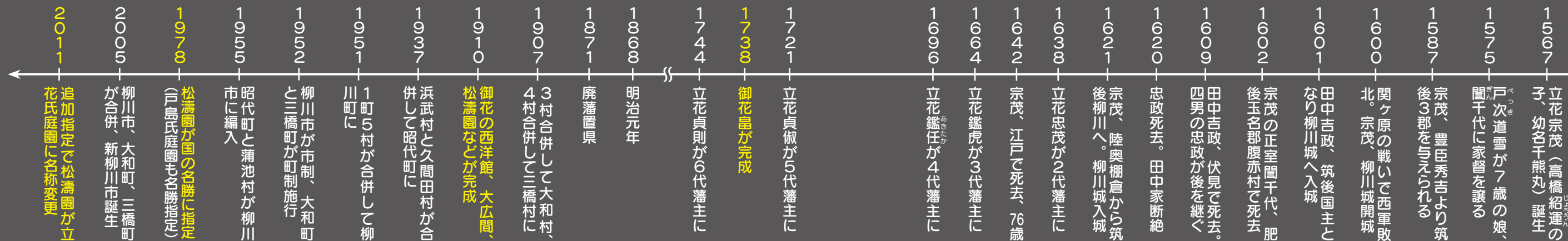
明治22年、柳川に帰郷。屋敷の修理や「御宝蔵」の再建、明治36年に御隠邸の移築、翌37年に「御佛殿」を建設しました。

また、寛治は明治43年に、接客のための「西洋館」「大広間」や、家族が暮らす「御居間」、御花を取り仕切る「家政局」などの屋敷を完成させました。そして、大広間に面した、クロマツで池の周りを囲む華やかな「松濤園」もこのころに造営。現在の御花の原型ができたことになりました。

その後、昭和53年に、西洋館や大広間、松濤園などが国の名勝に指定。平成23年に追加指定を受けて、御花の敷地すべてが国指定名勝となりました。

御花と柳川のあゆみ歴史かんたん年表

〈西暦〉 〈主な出来事〉





◀能衣装「白地祇園守紋狩衣」



◀宗茂の甲冑「鉄鍬皮包月輪文最上胴具足」(桃山時代)

▶重要文化財「剣銘長光」刃長25・3cm(鎌倉時代)



▶国宝「短刀銘吉光」刃長23・2cm(鎌倉時代)



▶茶人としても有名な宗茂が大阪城で豊臣秀吉から頂いたと伝わる「唐物茶壺(呂宋壺)」(中国・明時代)



2



1



6

1明治40年の西洋館基礎工事の様子(立花家史料館提供) / 2明治43年ごろの西洋館2階の様子。自家発電所があり、輸入品のシャンデリアや電気器具を使っていた(立花家史料館提供) / 3西洋館2階の屋根の古い銅板や腐った木材を新しく補修した / 4門番詰所のドーム屋根の補修箇所 / 5西洋館のはげたペンキを取って新しくペンキを塗っていく / 6ガラスを押さえる漆喰が取れなかった窓ガラス。今回の工事で窓ガラスも補修



5



3



4

※文化財の写真はすべて立花家史料館提供

▶徳川御三卿の田安徳川家から12代藩主鑑寛に嫁いだ純姫の婚礼調度「黒漆地松唐草に葵紋散し時絵調度」(江戸時代末期)



職人の手仕事が残る 西洋館などを3年で修理

明

治43(1910)年9月に完成した西洋館は、今年で103年が経過。御花を訪れる人がまず目にする白い2階建ての洋館です。14代当主の立花寛治が来客をもてなすために、明治40年に工事が開始。建物の設計は、福岡県技手の西原吉治郎が行っています。棟梁は博多の讃井傳吉が、内装や家具などの調度品は株式会社三越呉服店(現・株式会社三越伊勢丹)が務め、古くから立花家の仕事に従事していた職人も工事に携わっていました。

今回、西洋館と同じ時期に建てられた門番詰所などが長年の風雨にさらされて劣化しているため、今年度から3年かけて補修工事を行います。今年度の補修工事は10月31日まで。

西洋館では、外壁のペンキの塗り替えや、窓ガラスを押さえる漆喰が劣化している窓の修理の他、西洋館の屋根の銅板の交換や雨どいの修理などを行います。

また、門番詰所は、ドーム屋根の飾りが8月に折れたため、雨水が入って木材が腐らないように、屋根の補修などを行います。

大広間の西側部分にある屋根の一部も、深刻な雨漏りをしていたため、銅板や木材の補修を行います。

庭園以外に国宝の短刀など貴重な文化財が保存

柳

川には国が指定する文化財が9つあり、そのうち3つが御花にあります。1つは名勝の立花氏庭園ですが、「短刀銘吉光」が国宝に、「剣銘長光」が重要文化財に指定されています。

国宝の短刀は、山城国(京都)の刀工である吉光の作。立花家の先祖が足利尊氏から頂いたと伝えられてきました。700年以上経ても輝きは変わらず、格調高く力強い名刀です。

また、重要文化財の剣は備前国(岡山)

全国に通用する西洋館 御花の雰囲気を楽しんで



名勝立花氏庭園整備委員会
松岡 高弘 委員長
(有明工業高等専門学校教授)

御花の西洋館は、全国にある明治期の有名な洋館と比べても見劣りしません。筑後地域で、まずこの西洋館に匹敵する格式高い洋館はないと言っているでしょう。設計者の西原吉治郎は福岡県の技術者ですが、明治時代における地方の技術者のレベルが高かったことが分かります。

その西原は、西洋館の外観を正面から見て左右対称にしています。通常は中も左右対称な洋館が多いのですが、西洋館は1階中央に主階段がなく左右対称でない設計になっています。そこは西洋館の特徴の一つですね。

また、大名家の明治期の住宅では、来客用の建物しか残っていないところが多い中で、御花は当主の居間や家政局など生活を感じさせる建物も残っています。他にはない雰囲気を感じることができます。

の名工、長光の作。この剣は初代柳川藩主、立花宗茂秘蔵のものとして大切にされ、宗茂が戸次道雪のもとに養子に行く日、実の父親の高橋紹運から「万が一、敵味方となった場合、先頭となって自分を討て、さもなくば潔くこの剣で自害せよ」という言葉とともに手渡されたという言い伝えがあります。

他にも、宗茂の甲冑や茶道具などの茶道具、立花家へ嫁いだ姫君の嫁入り道具など、大名家ならではの貴重な武具や調度品が大切に保存されています。

問い合わせは、市生涯学習課文化係(☎77・8832)、立花家史料館(☎73・2189)まで。

柳川の歴史と文化を 史料館で味わって

立花家 17 代当主
立花 宗鑑 さん
(立花家史料館館長)



私が子どものころ、すぐそばの掘割で泳いだり、網や仕掛けでウナギなどの魚を捕まえたり、ドンコ舟に乗ってさおをさしたりして元気に遊んだのを思い出します。関東などから来るお客様は、今も大切に掘割が残っていることをとても喜ばれます。これは柳川が誇るブランドであり、これからも大切にしていきたいところです。

立花家に残る文化財は、武具や茶道具、古文書などたくさんの種類があります。それらが1か所にこれほど多く残っていることは、全国的に見ても少ない。国宝や重要文化財の刀剣もそうですが、藩主代々の甲冑がそろっているのはとても珍しく、戦国時代と江戸時代のデザインの変化を感じることができます。柳川の歴史、文化を、この立花家史料館でぜひ味わっていただきたいですね。